

三百年のベール

三百年のペール

ポケット文春 104

1962 年 10 月 20 日 初版

1962 年 11 月 15 日 再版

定価 230 円

著 者 なん 南 じよう 條 のり 範 を 夫 ©

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西 8 ノ 4

印刷 精 興 社

印刷 大日本印刷

製本 矢 嶋 製 本

落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

二百年のベール

推理長篇

南
條
範
夫

文藝春秋新社

目次

売値五貫文	5	三百年の余弊	126
素朴な疑問	25	世良田元信活躍	146
奇怪な遊行僧	44	徳川家康の出現	168
暗澹たる事件	68	抹殺博士	185
不当な弾圧	83	犠牲者	204
家康出生の秘密	103	剝がれたベール	228
		史疑一卷	249

装幀 岡村夫二

売値五貫文

一

平岡素一郎もといちろうは机の上に右腕の肘を直立させ、その掌で尖った顎を支えて、眼の前の書物に眼を落としていた。それは素一郎が仕事の暇な時に、いつも半ば無意識の中にとるポーズである。そうすると、彼の長い顔は、長い茎の上に乗っているチューリップのように見えた。

尤も、それは、その形態だけの事で、彼の顔はどうみてもチューリップのように美しくはない。額も鼻も顎も長くて、色艶は余りよくないし、まだそれ程の年でもないのに、しみも大分出来ている。

ただ、巨きな眼だけは、割合に澄んでいて、時々、陽の光を受けた水の面のように、何か輝くものが、深くあお碧く揺らめいた。

仕事が暇なのは、何も今日に限った事ではない。毎日、県庁に出勤してきても、大した用件はないのである。午後は大抵、チューリップ形態を保って、役所の事務とは関係のない書物を読んでいるか、對手があれば、無駄口を叩いているより他、仕方がないのである。

窓の外は、五月の緑、濠をひかえた石垣の上の松の色は、きざ 冴え冴えと濃く、濠の水を碧に染めている。時には、太陽さえも緑色に見える位だった。

その日の朝刊は、第三次伊藤内閣が、前夜、臨時議會を解散した事を報らせていた。

東京は大騒ぎに違いない。この静岡の県庁でも、知事を始め若干の有力者たちは、それが自分たちの進退に係してきはせぬかと心配しているだろう。

だが、有難いことに素一郎にはその心配もない。むしろ、余り自分に好感を持っていないらしい現知事が更迭してくれば、この上もない。更迭しなくても、大して気にはしないつもりではいるのだが。

知事の千家尊福は、素一郎を、かなり不愛想な、やや怠惰な下僚だと思っているだろう。同僚は、むしろ、多少風変わりな好人物だと思っているらしい。風変わりだと言うのは、彼が休みの日になると決って、市の内外の古い神社仏閣旧蹟を訪ねて、蝕んだ文書や苔むした石碑などにうつつを抜かしているからであり、好人物と言うのは、彼が金銭に極めて淡泊だからである。このような同僚の評価は、上司の彼に対する不満と共に、彼の前任地である愛知県庁や、岐

阜県庁に於ても彼に對して与えられたものであった。

新聞を片手にして、開け放された扉口から這入ってきた内務部第二課所屬の技師の吉田清介は、素一郎のいつもの姿を見ると、にやっと好意的な微笑を洩らしたが、その傍に進んできて、肩を叩いた。

「新聞をみたかね」

素一郎は掌にのせた顎をそのまま少し横にねじて、無精つたらしく答えた。

「うむ、解散したらしいね」

「いや、君のおじさんの事だ」

素一郎は、苦笑した。對手は、空いていた椅子を引き寄せて、元氣よくしゃべり出す。

「君の尊敬すべき伯父上平岡浩太郎氏は、いよいよ大活躍を始めたらしいじゃないか。見給え、ここに平岡氏の大氣焰が載っている。——今日こんにちの際、薩長藩閥政府を打倒せんには、かつて彼らが徳川幕府を倒せるの故智こちに倣い、往年の薩長連合と等しく、自由進歩兩党の連合を以てすべきのみ、ただこの兩党の聯鎖れんさとなりて、かつての坂本竜馬の役目をなすべきもの、不肖ふしょう浩太郎を除いて他にあらず。我今、地下無尽蔵の宝庫より得たる巨万の富あり、これを以て同志の事業を助けて、民間党合同の大旗たいはを推し立てん——どうだね、大したものだ」

素一郎は、もう一度、苦笑を洩らした。平岡浩太郎は彼の伯父でも何でも無い。たまたま姓

が同じであり、年齢が伯父としてふさわしいと言うだけの事である。いつか話の序に、清介が親戚かと聞いたので、伯父だと答えた。勿論、冗談である。對手もそれは知っていた。しかし、それから後、清介は、いつも君の尊敬すべき伯父上と言って、からかうのである。

平岡浩太郎と言う人物は、中央政界で、極めて異色のある人物であった。九州の産で、廿一年前の西南役には、密かに西郷方に味方して俠名を謳われたが、その後、政界に志を立てた。政治をやるには何よりも金が要ると考え、炭坑に手を出したが、日清戦争に遭遇して、一挙に莫大な富を獲得し、これを政治資金として、惜しみなくばら撒いたので、今や隠然たる勢力を持つに至ったのである。犬養木堂、大石正己、箕浦勝人、西山志澄、栗原亮一など自他共に許す政界の策士連中が、日夜その私邸に集まり、平岡を謀主として、大隈重信の進歩党と板垣退助の自由党とを合同させようと画策している。

伊藤博文が議會を解散したのは絶好の機会である。恐らく、民間両党の合同は実現し、伊藤内閣瓦解の後を引き受けて、隈板内閣が成立するであろう。そうなれば、平岡は勿論、殊勲第一等である。

「何だ、伯父貴が天下取りの大事業をやろうとしているのに、ばかに気乗りしない顔をしているね、どうも君は不肖の甥だね」

素一郎が一向に自分の話に乗ってこないのので、清介は少々がっかりして言った。

「内閣を組織するのを、天下を取ると言う風に言うのは、変だな」

素一郎は、漸く、顎を掌から離した。

「変なことではないさ。総理大臣は、正に関白か將軍だ、総理になれば天下をとったことになるさ。君の伯父さんは、さしずめ、黒田官兵衛か天海僧正か、と言う処だ」

「とうとう、伯父さんにしてしまったな、僕はまだ平岡浩太郎氏には一面識もないのだぜ」

「しかし、万人が浩太郎氏は君の伯父貴だと考えている。少くも、この静岡県庁内ではね、今に君に対する態度が変わってくるぞ」

「冗談じゃない、そんなことを言いふらしているのは、君じゃないか」

「そうだ、だが、面白いじゃないか、構わないから、伯父貴にしてしまい給え。何でもないことだ、君が日記帳に、本日わが伯父浩太郎、自由進歩両党の合同に成功し、藩閥政權打倒の第一歩を印す——とでも書いておくんだね、五十年か百年位経つと、誰も君が浩太郎氏の甥であったことを疑わなくなるさ」

清介が勝手な気焰をあげた上、新しい話対手を求めて姿を消していった後、素一郎は、再びチューリップ型に戻って、ぼんやり、窓の外の松を眺めていた。

——そうだな、百年も経てば、自分が浩太郎の甥だと言っても、いや、伊藤博文の甥だったと言っても、通るかも知れないな、変なものだな。

多分、前夜遅くまで読書をして睡眠不足だった為であろう、そんな愚にもつかぬことを考えている自分に気がついて、三度目の苦笑を洩らして、視線を机の上の書物に戻した。

二

清介が去ってから一時間程経った頃、今度は隣室から、山根三造やまねさんぞうと言う青年が、やってきた。これは素一郎の直属の部下である。

「平岡さん、ちょっと困った事が出来ました」

三造は真面目に、よく働く吏僚なので、余り勤勉ではない素一郎にとっては、便利な存在なのだが、気の弱い男で、いつも困ったような顔をしているし、それがいよいよ困りましたと言う時は、やせたからだを更にその半分に縮めてしまったような様子をみせる。

「どうしたのだね」

「はあ、実は、K高等小学校の生徒が、馬淵の部落の人たちに対して、侮蔑ぶべつ的言辭を弄したと言うので、部落民たちがひどく激昂げつごうして、学校に押しかけていて騒いだと言うのです」

「どこかね、その馬淵部落と言うのは」

「市の西南にあって、川の辺と言う部落と並んでいるのですが、古くから鯰さくらものや説教者の住んでいる処なのです」

「ささら者？ 何だね、それは」

「徳川時代に駿府すんぶの牢獄が、今の横田町の南にあったのですが、その牢獄の雑役を勤めたのが、ささら者なのです。彼らは、その傍かたわら、灯心、附木つけぎ、などを売って生計を営んでいたようですが、その家族の女たちは、毎年歳暮になると、笠の上に、裏白の葉と、しめを附けたのを被り、八寸位の竹片を叩いて拍子をとりながら市中を徘徊して錢を貰い、節季せき候ごうと呼ばれたそうです。それに、一家の主婦は、往々比丘尼びくにになる風習があつて、戦国の頃は、首実検の時、首を洗ったり、血刀を洗ったりしたと言いますが」

「説教者と言うのは？」

「それは、元来、三味線に合せて説教を語り、勸進かんじんして歩いたもので、ささら者とは別なのですが、後にはささら者と同様、牢獄の雑役に従つたり、附木や灯心を売って暮らしを立てていたようです。何れにしても、双方とも、延宝年間に、川の辺・馬淵の両村の一部に定着させられて、特殊の社会を形成するようになったらしいのです」

「ふーむ、よく知っているね、君は」

「いえ、つい先刻、問題が起こつてから、慌てて調べてみたのです」

「何故、ささら者と説教者とを、そんなに別扱いにしなければならなかったのだろうかね」

「さあ——それは、私にもよく分りません、全く理由がないように思われますが」

「理由は無いね、幕府の政策以外には——とすれば、幕府が何故、そんな不合理な政策をとったかと言うことが問題だな」

三造は、そんな一般論よりも、当面の事件に戻りたくて、半分に縮まっているからだを、更に三分の一位に縮めた。

「はあ、徳川幕府の政策はもとより怪しからんと思いますが——さし当り、この事件を、どうしたものでしょう」

「そうだ、幕府の政策を今更憤慨してみても仕方がない。明治も既に卅一年だと言うのに、青少年がまだそんないわれのない差別感を持っているとは、それこそ怪しからん」

「ところが、こうした事件は、屢々起っております」。

それは、素一郎も聞いた事がある。しかし、今迄は、直接そうした問題にぶつかった事がないので、切実に考えもしなかったし、特殊部落なるものの内容を、はつきり調べてみたこともなかったのである。

「とに角、その生徒の言動は、弁解の余地はない、何よりもその精神が悪い、陳謝さすのだな」
「はあ、校長が不在だったので受持教員が応対して、鄭重に詫びたそうですが、仲々聞き入れないで、改めて校長に談判に来ると言って一応引揚げていったのです」

「先方がもう一度押しかけて来る前に、校長が出掛けて行って、謝ってきた方がいい、もしそ

れでも済まなければ、私が行って、よく詫びを言ってもいい」

「はい、そうお願い出来れば」

三造は、ほっとして、顔色を輝かせた。県庁のお役人、それも参事官と言う地位にある人が、頭を下げると言うことは、かなり効果的であるに違いないのだ。

「早速、その旨を、校長に伝えます。どうも、有難うございました」

三造は蒼惶^{そうこう}として去っていった。

——怪しからんことだな、全く。一体、どうして、特殊部落などと言うばかげたものが出来たのだろう。徳川幕府は、どうして、そんなに峻厳な差別待遇をする必要を認めたのだろう。

素一郎は、睡眠不足の顔で、繰返し同じことを考えたが、ふっと、自分が机の上に拵けて、今の今迄読んでいた書物に気がつくと思わず、ふーむと、呻った。

三

それは、書物と言っても、活字本ではない。駿府政事録と題された九巻の写本の一冊である。内容は、徳川家康が、將軍職を秀忠に譲り、駿府に隠居してからの日記で、慶長十六年八月から元和元年十二月に至るものである。

当時の政治外交に関する重要事件は勿論、宗教文学医術等の事に至るまで、精細に記述され

たもので、江戸時代史研究に不可欠の根本史料とされている。

筆者は、その写本では後藤庄三郎光次となっている。光次は三河以来家康に仕え、後に金銀奉行となった男だが、実際の筆者は光次ではなく、林道春（羅山）だとも言う。道春ならば、家康に重用されて幕府の文書作成に与った人物だ。^{あづか}何れにしても、家康の身边に極めて親近したものでなければ、到底知り得ないことが、詳細に述べられている。

素一郎は、それを紫山竹中啓之助から借用した。

竹中紫山は、城西馬場町に住む老学者で、彼の漢詩の師である。素一郎も、融軒と号して、時々余り上手ではない漢詩をものしていた。

紫山はそれを、素一郎に貸与した時に言った。

「あんたも、駿府に職を奉じている以上、駿府政事録ぐらいは読んでおいた方がよいな。これは松平忠明の著と言われる当代記と並んで、徳川初期の政治の表裏両面を知るには、是非とも読んでおかねばならぬものだ。尤も、当代記の方が、元龜から慶長廿年頃迄を記したものだから、そちらを先に読むのが順序だが、生憎、人に貸して手許にない。まあ、この方から先に読んでみなさい」

素一郎が、それを読み出したのは、一昨日からである。

読む時間は、専ら、役所における閑暇を利用した。甚だ読みにくい写本の文字をゆっくりと

辿^{たど}って読解してゆくのは、最適の時間だと考えたからである。千家知事が、素一郎を怠惰な下僚と見るのは、多分こんな事の爲であらう。

——慶長十六年辛亥^{かのとい}、八月朔日^{ついたち}、雨降、自^{きようより}三京都^三飛脚到来

第一頁は、このようにして始まっていた。

ところどころ、虫に喰われて読めないところもあるが、なかなか面白い。

十五日、家康は浅間に行つて鉄砲を打った。二町向うの^ま的に五度も当てたが、近侍の者は誰も当て得なかった。鳶^{とび}が廻っているのをみて、三度これを狙い、二羽を射落とした、後の一羽は足を射たれたが逃げ去った、距離は五十間位だと言う。相当の手腕らしい。

毎日のように、献上物がある。有馬修理太夫、長岡越中守、松平陸奥守、水野対馬守、本多佐渡守、板倉伊賀守、毛利中納言等々。献上物は、黄金、象牙、白絹、孔雀、大鷹^{さけ}、巻物、梨子^{なし}など。こんなに貰つて、どう処分するのだろうかと思われるほどだ。

その上、十月三日には、貢納米の代価一万九千両を殿守の御庫に納むとある。

十月六日、駿府を出て、途中遊びながら、十六日江戸着、將軍秀忠以下在府の諸大名に会い、川越に放鷹に行き、十一月廿三日に駿府に戻っている。

十二月には殆ど連日、府中近辺で御放鷹。全く羨ましい身分だ。

慶長十七年壬子^{みずのえね}一月にはいっても、岡崎の方まで放鷹に行っている。